

長野県の埋蔵文化財情報誌



ひんご遺跡出土土偶

信州の遺跡

第8号

最新調査成果から 1

パイオニア 米づくりを伝えた開拓者

長野市 塩崎遺跡群



長野市南部、千曲川左岸に広がる塩崎遺跡群に人々が住み始めたのは、弥生時代前期末～中期初頭と考えられている。この時期の土器棺再葬墓が 10 基みつかった。棺に用いた土器は、壺の口縁や頸部に帯状の粘土を貼り付けたり、二枚貝の貝殻で表面をひっかけて文様をつけるといった東海地方にみられる特徴をもっている。これらの土器とともに稲作文化が伝えられ、集落が形成されたと考えられる。(長野県埋蔵文化財センター 飯島公子)

【土器棺再葬墓につかわれた土器 (背景は塩崎遺跡群)】

土器棺再葬墓とは、何らかの方法で白骨化した遺体を土器の中に納めて葬る墓のこと。



【貯蔵穴より出土した石鎌状の石器】
石鎌は、穂を摘むための道具とされる石器。

【土器棺再葬墓の出土状況】

深く掘り込まれた竪穴住居跡

栄村 ひんご遺跡



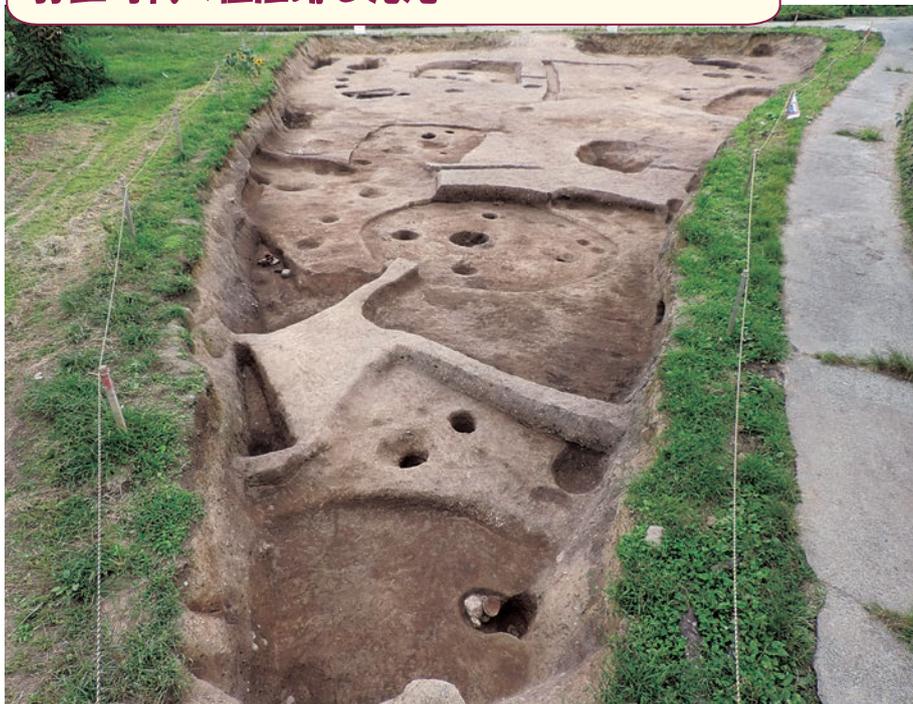
【竪穴住居跡の炉】 炉石の脇から石棒が出土した。

【竪穴住居跡】 複数の竪穴住居跡が重複している。浅い住居跡の上から縄文時代後期の深い住居跡が掘り込まれている。

ひんご遺跡では1m以上の掘り込みを持つ竪穴住居跡が発見された。炉跡から出土した土器の型式から縄文時代後期（約3,500年前）と考えられる。県内の調査事例をみると、竪穴住居跡の掘り込みは深くても70cm程度のもものが多く、1m以上の深さは珍しい。金属の掘削具も無い縄文時代にこの深さまで掘ることはかなりの重労働であっただろう。縄文人は何のためにこれほど深い竪穴を掘ったのだろうか。（長野県埋蔵文化財センター 太田光春）

最新調査成果から3

弥生時代の住居跡を発見 長野市 さんさいたこ 三才田子遺跡



弥生時代・平安時代竪穴住居跡

弥生時代竪穴住居跡

田子川の左岸に広がるさんさいたこ 三才田子遺跡では、弥生時代中期・後期、古墳時代後期、平安時代の竪穴住居跡が見つかった。隣接する田子川右岸の台地上に位置する籠沢遺跡では弥生時代の集落が確認されていなかったが、今回の調査では弥生時代の住居跡が一番多く検出された。左岸の一段下がった場所に弥生時代中期の集落がつくられはじめ、後期にかけて長く営まれていたことがわかった。（長野市埋蔵文化財センター 遠藤恵実子）

古墳時代の石製模造品集中

長野市

あさかわせんじょうち
浅川扇状地遺跡群



【石製模造品】完成品（左上）、未成品（左下）、製作時の破片（右）



【古墳時代中期の竪穴住居跡】石製模造品とその破片が見つかった。

平成 27 年度の発掘調査で、古墳時代中期の竪穴住居跡床面から石製模造品が見つかった。石製模造品は滑石^{かつせき}製で、鏡や勾玉などの形を模した祭祀の道具である。製作時に使用する道具は発見されなかったものの、その際に出る滑石の破片 3,850 点や未成品 172 点、完成品 9 点が見つかった。それらは 2～10mm 程度と非常に小さいもので、石製模造品を製作した人々の技術水準の高さがうかがわれる。今後、石製模造品の製作が行われた可能性を検討していきたい。（長野県埋蔵文化財センター 福井優希）

平安時代を中心とする集落

松本市

たかばたけ
高畑遺跡



調査地遠景



炭焼窯の炭出土状況

高畑遺跡は奈良時代から中世にかけての遺跡である。平安時代に東山道の覚志^{かがしのうまや}駅が置かれたとされる芳川^{よしかわ}地区に所在している。今回の 6 次調査では約 20,000m²を対象とし、平安時代を中心に 160 軒を超える竪穴住居跡や炭焼窯 3 基などの遺構、皇朝十二銭の一つである「富寿神宝」^{ふじゆしんぼう}や緑釉陶器などの遺物を確認した。住居跡の分布域は時期ごとに異なり、集落の中心域は移動していたと考えられる。その他、集落を区画する溝が確認されるなど、当時の集落の様子をうかがうことができた。（松本市教育委員会 小山奈津実）

古代集落跡と中世の堀跡 佐久市 藤ヶ城跡



発見された堀跡



調査地全景

藤ヶ城は、幕末の文久元年（1861）に築造が開始された岩村田藩内藤家の城である。今回、岩村田小学校建て替えのために発掘調査が行われ、古墳時代後期から平安時代の集落跡等が検出された。

残念ながら藤ヶ城に関連する遺構は確認されなかったが、中世後期と推定される幅 8m、深さ 5m の堀跡が発見された。この堀は、当地の小字名「上の城」が示唆する未知の城館の存在を示す可能性があり、今後の調査の進展に期待がもたれる。（佐久市教育委員会 富沢一明）

寺院推定地から「堂宇」を発見 飯田市 龍源寺跡



龍源寺跡は飯田市上久堅地区に位置する。ここには「龍源寺」の小字が残り、寺院があったと考えられている。

発掘調査によって、3 間×3 間の礎石建物跡が発見された。建物跡は谷状地形を大規模に造成した上でつくられていた。礎石を覆う層から出土した陶磁器からみて建物跡の年代は 15 世紀で、礎石の配置から堂宇のような建物と推定される。今後、類似する調査事例と比較し、ここに礎石建物跡があったことの意味を明らかにしていきたい。（長野県埋蔵文化財センター 腰地孝大）



神之峯城跡



【礎石建物跡】

礎石の上と、柱の推定位置に模擬柱を置いて撮影している。

【龍源寺跡（手前）と神之峯城跡】

神之峯城は、天竜川左岸を治めた知久氏の本城とされる。龍源寺跡とは川を挟んで近接している。

珍しきもの 縄文と弥生のカオ比べ～ひんごと塩崎の土偶から～



【ひんご遺跡】(栄村) 縄文時代中期後葉 高さ 6.3cm
いわゆるハート形土偶の系統と考えられる。顔面は磨かれて成形され、鼻の表現はリアルである。顔面装飾はないが、つくりは丁寧である。白っぽい色調も新潟県内出土のものに近い。



【塩崎遺跡群】(長野市) 弥生時代中期初頭 高さ 4.5cm
線刻で目と口の周り、頬に入れ墨が表現されている。顔の表現は目と口の凹みのみであり、鼻は最初から作られていない。ひんご遺跡の土偶と比較して、つくりは粗雑である。

栄村ひんご遺跡から、縄文時代中期の土偶が出土した。鼻の下をのぼした独特の表情をしており、類似品は県内にはなく、新潟県魚沼地方の道尻手遺跡から出土している。一方、長野市塩崎遺跡群からは弥生時代中期の土偶が出土した。弥生時代になると土偶はほとんど作られなくなるが、東日本では土偶形容器(容器形土偶とも。子供用骨蔵器と考えられている)として製作されていることが多い。本例も半円形の髷、顔の入れ墨(黥面)など土偶形容器と同じ表現がされている。どちらも口を開けて何かを語りかけているか、歌を歌っているようにもみえるが、いかがだろうか。(長野県埋蔵文化財センター 片山祐介)

掘るしん in しののい 2016 長野県埋蔵文化財センター出土品展



平成 28 年 2 月 14 日(日)～2 月 19 日(金)
に長野県埋蔵文化財センター出土品展「掘るしん in しののい 2016」を開催します。ヒスイや鉄製品などの「地域と交流」をテーマとした遺物展示や、ふだんの業務内容を紹介します。詳しくはホームページをご覧ください。

(長野県埋蔵文化財センター 谷 和隆)

場 所：長野県埋蔵文化財センター展示室

公開時間：午前10時～午後4時

講演会：

日 時 2月14日(日) 午前10時～12時

場 所 JAグリーン長野 グリーンパレス

テーマ 地域と交流の考古学

「玉とヒスイからみた交流」

調査第3課長 川崎 保

「土器の胎土分析からみた交流」

主任調査研究員 水澤教子

講演会終了後、埋蔵文化財センター展示室にて、職員による展示解説を行います。

弥生時代の鉄製品大公開

～木棺墓や住居跡から出土した鉄製品～



昨年度実施したときの様子

【鉄剣】(左)

長さ 22.7cm

【刀子】(中上)

長さ 11.5cm

【鉄鏃】(中下)

長さ 7.4cm

【板状鉄斧】(右下)

長さ 7.9cm

板状鉄斧と鉄鏃は住居跡から、刀子と鉄剣は墓からガラス小玉などとともに出土した。

弥生時代に普及しはじめた鉄製品が、塩崎遺跡群から多量に出土しています。今回は、応急処理が終わった製品をはじめて展示します。とくに木棺墓から出土した刀子は北信地域で2例目、ほかの資料も鉄剣をはじめ善光寺平の遺跡で5本の指に入る発見です。みなさんぜひ当時最先端の製品をみにいらしてください。

特集 信州縦断 近世の城郭遺跡から出土した宝物

近世の城は、権威の象徴として人々が仰ぎ見る地域のシンボルであった。現在は城下町の景観を含め、貴重な文化遺産として地域史を具体的かつ身近に感じさせてくれる。今回は、長野県内13の藩主による政治の拠点でもあった近世城郭のうち、発掘調査が行われている4件について、出土した逸品とともに歴史考古学の成果について、調査担当者の皆さんに紹介していただいた。

長野市 まつしろじょう 松代城跡



出土した軒瓦（六文銭紋・雁金紋）



復元された太鼓門



松代城全景



被熱した一分判金（上）

被熱した寛永通宝（下）

（ともに本丸末申隅櫓跡出土）



まつしろじょう 松代城は、戦国時代に武田信玄が築いた「かいづじょう海津城」がその始まりといわれており、明治の廃城まで続いた松代藩真田十万石の居城である。発掘調査では、焼失した「ごきんぞう御金蔵」の位置する本丸末申隅櫓跡において、被熱した貨幣が出土している。平成16年に城跡の保存修理が完了し、太鼓門等が復元された。（長野市教育委員会 宿野隆史）

上田市 うえだじょう 上田城跡



旧矢出沢川の河道と推定される落ちこみ（左上）

樹木屋敷との境界から見つかった堀跡（左中）

中屋敷（作事場）跡の堀の断面（左下）

本丸堀から出土した金箔鯨瓦（中上）

（上田市立博物館写真提供）

二の丸堀から出土した金箔鬼瓦（中下）

（上田市立博物館写真提供）

藩主屋敷空堀出土の肥前陶磁（上）

うえだじょう 近年の上田城跡の発掘調査は二の丸堀、藩主居館跡、なかやしき中屋敷、さくじば作事場跡などで実施した。二の丸堀の調査では、せんごく仙石氏の復興以前に百間堀付近を流れていたとされる旧矢出沢川の河道と思われる上田泥流層の落ち込み（谷状地形）を確認した。本丸・二の丸の堀からは以前、金箔瓦が出土している。（上田市教育委員会 和根崎剛）

まつもとじょうさんのまる
松本市 松本城三の丸跡 (土居尻) どいじり



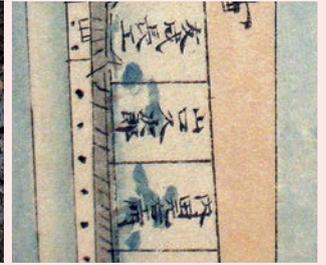
(天) 正拾一 (年) (癸) 未六月四日

窪地の埋め土から出土した天正11年(1583)の年号が記された板材

調査地全景(西から撮影) 中央下が18世紀初頭に埋められた窪地の



窪地の埋め土から出土した織部四方鉢



『維新前松本藩士族屋敷地割図』(1867)に記された調査地(山口久次郎宅)



幕末の火災で廃棄された大量の陶磁器



底部に「山口姓 正月」の墨書がある餌猪口(鳥の餌入れ)

近世遺跡の調査では絵図等から多くの情報が得られる。幕末の絵図では調査地は藩士・山口氏の屋敷が記されていた。発掘調査では、山口の墨書のある餌猪口が出土したことから、絵図の記載を裏付けるものとなった。しかし下層では、武家屋敷の痕跡が確認できず、絵図にはみられない窪地を確認した。絵図の裏付けや史実のない新たな発見も、近世遺跡調査の魅力である。(松本市教育委員会 竹内靖長)

いいだじょうかまち
飯田市 飯田城下町遺跡



近世の陶磁器類



三つ葉葵の櫛



水琴窟



焼塩壺

飯田城下町の町屋の発掘調査では、近世初頭の陶器類や多様な陶磁器類・焼塩壺・水琴窟に使われた甕等が出土し、飯田城下町が整備され始めた時期や商家の暮らしを垣間見ることができる。また、ゴミ穴から徳川家の家紋である三つ葉葵の時絵が施された鼈甲製櫛が発見され、その入手経路に想像が膨む。

(飯田市教育委員会 山下誠一)

考古学の窓

多くの井戸跡は、集落遺跡にもなっている。古代より人は暮らしに必要な水を手に入れるために井戸を設けていた。自然の湧水点である泉は、汲めども尽きぬことから信仰の対象であった。井戸は、地下の帯水層から水をくみ上げるために人工的に掘られたものだが、『万葉集』によれば、井戸には巫女的な乙女がいた（真間の手児奈）。泉と同じように神聖視されていたらしい。

弥生時代や古墳時代の井戸跡には、神にささげられたかのように完形の土器が埋納されていることがある。井戸に対する祈りや願いはいにしえまで遡るようだ。その井戸跡からは、塩崎遺跡群をはじめ長野盆地南部では、多くのモモの種子も出土している。

モモと言えば、「日本神話」で、イザナギが黄泉の鬼に追いかけられた時に、モモを投げつけ、鬼を追い払った故事が思い起こされる。

中国の古典には、モモが悪鬼を払うとある。モモの靈威性は、古代中国から伝わったのだろう。モモは、単なるお供えではなく、邪を防ぐ意味もあったのだろう。全国的に縄文時代の井戸はまだみつからないので、稲作とともに井戸づくりやモモの信仰も弥生時代に伝わってきたと思われる。

さて、長野盆地は、『川中島白桃』に代表されるように今もモモ産地として知られる。塩崎遺跡群周辺でもモモ栽培の灌水用の井戸が今も多く設置されている。モモと井戸は、実際にかかわりがある。

弥生時代の終わりから古墳時代にかけて、井戸跡から多くのモモの実が出土しているが、この時期に多くの鉄製品やヒスイが遠隔地から当地にもたらされている。こうした貴重品が集積される背景には、長野盆地ならではの特産物があったはずだ。当地の古代モモもその交易品の一つではなかったのだろうか。

井戸は、地表から地下深く細長く掘り下げた穴であるが、まさに現代から古代をつなぐ「窓」でもある。今後注目して調査をすすめたい。（長野県埋蔵文化財センター 川崎 保）



【古代モモの種子】長野市塩崎遺跡群井戸跡（SK2670）出土

編集後記

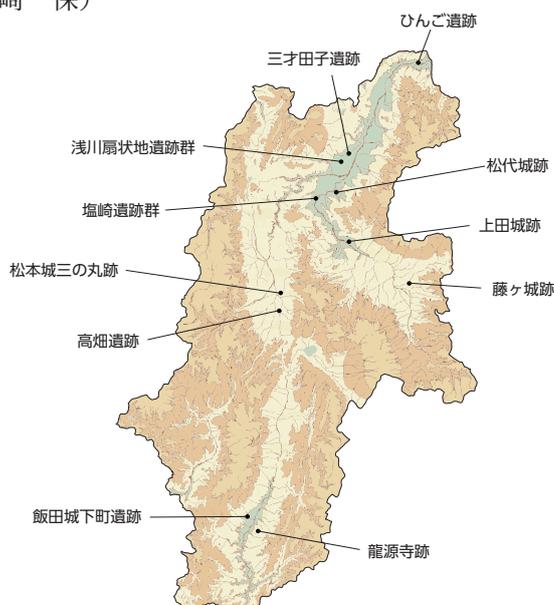
本号では本年度の発掘調査速報として、北は栄村から南は飯田市まで、時期的には縄文から中世にかけての遺跡を取り上げ、ビジュアルな成果を掲載しました。今後これらの遺跡が、どのように地域史の中で位置づけられるのか楽しみです。

特集「信州縦断 近世の城郭遺跡から出土した宝物」では、発掘調査からみえる近世城郭について、逸品を紹介していただきました。この機会に、ぜひ信州の城めぐりをされてはいかがでしょうか。なお掲載した遺跡の位置は右図に示しています。

ご執筆いただいた方々には、掲載写真もご提供いただきありがとうございます。文末に所属とお名前を付記しました。ご協力に深く感謝いたします。（水澤・風間）

【お詫び】

『信州の遺跡』前号の7頁1～2行に誤字がありました。「朽ちて残らないことは珍しい。」は「朽ちて残らないことが多い。」の誤りです。



長野県教育委員会事務局 文化財・生涯学習課

〒380-8570 長野市南長野字幅下 692-2
TEL 026-235-7441 FAX 026-235-7493
メール bunsho@pref.nagano.lg.jp

(一財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ布施高田 963-4
TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157
<http://naganomaibun.or.jp/>